

歌と土木



土木合唱団（シヴィル・クワイア）の練習風景

2020年1月号の特集は「歌と土木」をお届けする。

歌をうたう。この「うたう」という行為には何種類かの漢字が当てられている。歌う、唄う、謡うなどである。動作としては単純である。声を出す、それに合わせて体を動かす。それだけである。誰がこの動作をしても、大差はない。しかし古来より人は色々な想いを歌に込めてきた。その想いが色々な字を生み出したのではないか。少なくとも筆者はそう思う。

なぜならば歌の事を考えると、説明がつかない事があるからだ。なぜあの歌を聴くと悲しくなるのだろうか。なぜあの歌は自分を幼少期に連れ戻してくれるのか。なぜあの歌はうだるような暑い夏休みを思い出させるのか。歌には感情を引き起こす何かがある。

また「うたう」からには、そこに言葉がなければならぬ。そしてその言葉は、聞く人・うたう人の心を打つものでなければならぬ。そうでないと、後世にまでうたい継がれないだろう。歌には、先に言葉がなければならぬ。

そこにメロディが付けられる。言葉が立体的になり、聞く人・うたう人の心に突き刺さる。つまり、「うたう」という行為には気分を高揚させるところがある。カラオケで拍手喝采を浴びたり、好きなアーティストのコンサートで歌ったりなどである。読者の皆様にも思い当たるころがあるのではないか。

さらに「うたう」のが面白いところは、集団でも一人でも出来るところだ。この点を見ると、スポーツの中でも特にランニングに似ているように思える。どちらも身体一つから出来る。「走る」と「うたう」、共に人間には根源的な動作なのかもしれない。

ともあれ、2020年がスタートした。新年の祝いに「ご家族・友人と「うたう」のはどうだろうか。この特集が選曲のアシストになれば幸いである。